

静脈産業の

現在地と未来



(2)

資源循環ネットワーク
彌永 冴子

夏の間はクワゲだらけだった直島の海も、秋に入り段々と透明度を増し、足をつけるヒヤリと肌寒く感じるようになった。と同時に、家から徒歩3分圏内に海がある贅沢さを毎日かみしめている。これまで都会や農村、さまざまな場所で暮らしてきたが、田舎で大自然を目の前にポーッと過す時に感じる「豊かさ」以上に、幸福を感じる瞬間はあまりない。目の前の海を見ながら「経済活動とSDGs達成がトレードオフ」という議論は、果たして本当に

そうだろうか」と思う。これまでの価値基準がど

に国の豊かさを示す指標なのか？」という問いを指標構築が進む。幸福度

経済指標のあるべき姿を問い直す

これら5つの「非財務指標」を取り込むとする動きである。

自然資本の持続性に資する静脈産業の役割

活動や産業構造が変化した時、あなたの価値観は今のままだろうか？

よく耳にする。GDPは、ボランティア活動等

を測定する「幸福度指数」、環境負荷を考慮した「グリーンGDP」、環境や社会の持続性を考慮し、人

これまで、国の豊かさや生活水準を測る尺度には、ある一定期間に国内で生産された最終的な財・サービスの付加価値

を豊かにしてくれるイン

資本のうち、「自然資本」は水、土壌、森林、鉱物資源、生物多様性等を指す。特に鉱物資源や水は、付加価値には合算されないリユース市場やシェアリングエコノミー市場における静脈産業の役割も大きい。特にリユース市場はフリマアプリ等の台

の総額を示すGDPが用いられてきた。一方で、や、モノを循環利用する

IIRCが公表している国際統合フレームワー

クでは、資本は大きく自然資本、製造資本、知的資本、人的資本、社会・関係資本、財務資本の6つに分類され、財務資本を除いた5つが「非財務資本」である。GDPに代わる新たな経済指標構築の取り組みは、「非財務資本」を経済活動の指標に取り込むとする動きである。

格的にGDPの定義が見直されるきっかけとなる時、静脈産業は市場を牽引する主役となる。



図 6つの資本と静脈産業のミッション